SHR 疾患モデル通信　2008・5　NO. 26

「雑　感」

島根大学医学部病態病理学教授　並河　徹

学会や研究会とはそもそも何だったのか。そういうラディカルな疑問を時々持つことがある。おそらく、そもそもの始まりは、研究者同士が手弁当で集まって情報を交換し、ときには激論を交わし、親睦を深め、アイデアを出し合う場所だったのだろうと思う。しかし、現在そういう始原的な性格を残す学会、研究会はどのくらいあるのだろうか。大きな学会になればなるほど議事進行のように粛々と演題が進み、質問や討論の時間は非常に限られたものになる。質疑もなかなか「本音」が出せない雰囲気になる。

最近では、「専門医」制度の発展定着にともなって、学会がそういった制度の維持管理も引き受けるようになり、より「公的」な性格も強くなっている。「公的」性格が強くなるということは「たてまえ」を重視する必要が増してくるということだ。それは時代の流れであり、それ自体、否定すべきことではないだろう。それに、そういった大きな学会では、自分の知らない分野や方法論を「耳学問」できる貴重な場を提供してくれる、という利点もある。しかし、それだけではちょっと寂しいように感じるのは私だけだろうか。

研究者とはもともと、自分のやっていることが面白くて研究をしている。それで出世しようとか金儲けをしようという者は少数のはずである（最近、金儲けができる研究を推奨する世の中になってきているようだが、多くの研究者は、その流れに乗っているふりをして、実は研究を継続するための資金を得たいだけなのだ）。だから、自分の研究のおもしろさ、難しさなどを率直に、何の思惑もなく語り合いたいと考えている者はたくさんいるはずだ。原初的研究会とはそんな研究者が集う場所だったのではないだろうか。

私が携わる疾患遺伝子探索研究の分野では、かつて、ひとつのエポックメイキングな研究会があった。子細は失念したが、1980 年頃の冬にアメリカのスキーリゾートで、昼間はスキーを楽しみ、夜は研究発表と討論を行う少人数の研究会があり、そこに集った専門を異にする研究者の討論の中から、RFLP という遺伝子マーカーを用いたゲノムスキャンニングのアイデアが出されたのだ。このときのアイデアが数年後のハンチントン病の遺伝子座同定をはじめとした「遺伝子ハンティング」の急速な発展のきっかけとなった。

リラックスした雰囲気の中、専門の異なる研究者が自由な討論を行う、そんな研究会が昔はもっとたくさんあったように思う。SHR 研究の草創期もそんな熱気に包まれていたのではないだろうか。その頃の雰囲気を体験された諸先輩が引退されていく中、残された我々はどうやってそのような「研究者の桃源郷」を作り育てていけばよいのか、思案に暮れている。

○目次

巻　頭　言・・・